予告です

福澤諭吉・大鳥圭介とミニエ銃

Fukuzawa Yukichi & Ootori Keisuke with a Minie Rifle

幕末・維新の安全保障

Japanese National Security at the end of Edo period

須川薫雄［著］
sugawa shigeo

本書は、歴史書です。

映画、ドラマ、小説、アニメなどの娯楽歴史ではありません。実証的な歴史を紹介する内容です。また、意外な歴史や真実、著名人の人間関係なども含めて、興味深く読み進められる構成です。なお、筆者のコメントや経験に基づく意見などは、本文中「＃」のマークで区別して述べております。

主人公は福澤諭吉、大鳥圭介と幕末・維新に西欧知識を日本に紹介した多くの先人たちです。主題は「ミニエ式小銃」と「大砲や艦艇」、日本がどうしても西欧に追いつけなかった「兵学の技術」。それらの知識を具体的に分かりやすく説明しています。

誰に読んでいただきたいか？ 日本と外国のはざまに生きる方々です。留学や赴任、ビジネス、研究など少しでも外国に近い若い方です。意図的に作られた内容でない歴史を語りたいのです。三人の孫たちには遺言として読んでもらいたいとも思います。

福澤諭吉

大鳥圭介

維新前夜の二人　20代後半
二人の人生は明治維新がほぼ中間点、命がけの毎日。

幕末・維新期、日本が幕藩体制の崩壊、西欧からの圧力、危機的な状況下、新型ライフル・ミニエ式など洋式小銃が多量に輸入されました。その「取り扱い書」や他の兵学書を翻訳したのが、福澤諭吉と大鳥圭介です。彼等は大坂の緒方洪庵「適塾」で蘭学を学び、洋式兵学の専門家でした。

安政年間、江戸の芝あたりに移り、蘭学、兵学教授を「稼業」としています。明治維新、二人は別な道、福澤は教育者、論者に、大鳥は技術指導者、外交官に。明治以降、「日清戦争」を巡り二人の活動が注目されました。

福澤は、西欧に対抗するために、おそらく日本で初めて、日本の国家的「常備軍」standard armyの必要性を説き、幕藩体制基盤の武士では近代軍隊を編成できず、と主張しました。まさに「日本安全保障論の父」father of national securityでした。

戊辰戦争の主役ミニエ式小銃

福澤研究fukuzawansの観点からは、福澤は「科学者」でした。理科系でした。蘭学と渡航を通じて、物理、化学、数学、博物、医学など当時日本一の博識でした。福澤の慶應義塾が三田に存在したのは、幕末に新橋、芝、金杉は江戸湾の防備線で、全国から砲台場建設、大砲、築城の西欧兵学を学ぶ者が、この地域に集まったのです。

筆者は日本の武器兵器研究家で、
陸自武器学校技術資料館顧問です。
HP／「日本の武器兵器」japaneseweapons.jp 主催
著書／『日本の機関銃』『日本の軍用銃と装具』
『日本の火縄銃１』『日本の火縄銃２』